

とらうべ

FIGO大会 産婦人科医と助産婦の パートナーシップのセッションに参加して

高橋克幸

国立仙台病院名誉院長

去る8月3日より8日までの6日間、FIGO(国際産婦人科連合)の第15回世界大会が、人魚で有名なデンマークの首都、コペンハーゲンで開催されました。この大会は3年に1度の割合で開催されており、1979年第9回の大会は坂元正一東大教授(当時)を会長に、東京で開催されています。世界各地、各国より、産婦人科関係のたくさんの演題が出題されますので、世界の産婦人科の研究、学問のレベル、医療の国際的傾向、各国の医療情勢がわかりますし、国際交流、情報の交換をするのに非常に価値のある学会です。また、国際大会の例にもれず、お祭りの要素も多分に盛り込んでありますから、楽しめる学会でもあります。

演題数、演題の内容は、いつもの大会と比較して大きな隔たりはありませんでしたが、この大会で1つだけ、

「おやっ」と思った会場(session)がありました。それは8月4日(月)の午前10時45分から12時まで開かれた、Global Partnershipという題の講演会です。ICM(国際助産婦連盟)によるセッションだったからです。

Ms. Selin E(デンマーク)が基調講演をして、「世界的視野でみると、恵まれない妊産婦は依然として多いし、妊産婦死亡率の高い国もほとんど減っていない。助産婦は健全な母子環境の確立という目標を実現するため、情熱をもって努力してきた。今後は産婦人科医、小児科医、その他の母子保健専門職の方々と助産婦が、強いパートナーシップを結び、協力して行動する必要がある。さらにパー

トナーシップの絆を母親、小児、家族にまで拡大したほうがよいし、コミュニティ(特に女性の団体)、政府、国際機関との幅広いパートナーシップの構築も考えよう。助産婦はそのための指導的役割を演じなければならない」と述べていました。

演者は発展途上国の貧弱な母子保健環境の改善に主眼を置いて話されたと思います。すべての国の母子を支援するICMならではの講演だったと言えましょう。

産婦人科医の大会の中に助産婦のセッションがもたれたことを不思議に思う方もいるかもしれませんが、FIGOとICMは協力団体の関係にあることがわかりました。また、デンマークでは特に助産婦の社会的地位が高く、医師と看護婦の中間(?)位に位置づけられているそうです。

日本の妊産婦死亡率は先進諸外国と比較すると、ワースト2、3にランクされる程悪いことはご承知のことと思います(厚生省統計要覧平成8年版)。これを改善するためには、助産婦が地域の母子保健指導にタッチすることと、産婦人科医と助産婦の信頼・理解に基づいたパートナーシップの緊密化が必要だと思います。医学生が看護実習をする時代となりましたから、今後は相互理解が進むと思います。周産期医療、母子保健という特殊な領域に専従する両者が協力、連携することは母子保健の向上だけでなく、われわれの労働環境の改善にもつながり、妊産婦により良質の医療・ケアを提供することになるのではないのでしょうか。

